SOSシリーズ

ウルフ谷の兄弟

デーナ・ブルッキンズ
宮下　嶺夫　訳

評論社

NDC 933　253P　188mm×128mm

評論社の児童図書館・文学の部屋

商標登録番号　第730697号　第852070号　登録許可済

児童図書館・SOSシリーズ4　ウルフ谷の兄弟

昭和59年12月20日　初版発行　定価 1,100円

訳者　宮下嶺夫

発行者　竹下晴信

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　凸版印刷株式会社

発行所　株式会社　評論社
(〒162) 東京都新宿区筑土八幡町17
電話代表 (260)9401
振替東京　8－7294

ISBN4-566-01253-0

〈検印省略〉

落丁・乱丁本は本社にておとりかえいたします。　(A－1)

ウルフ谷の兄弟（きょうだい）

デーナ・ブルッキンズ　宮下嶺夫訳

ALONE IN WOLF HOLLOW

by

Dana Brookins

Copyright © 1978 by Dana Brookins.
Japanese translation rights arranged
with the Seabury Press, New York
through Tuttle-Mori Agency, Tokyo.

ウルフ谷の兄弟（きょうだい）

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 日暮れの町 9
2 ウルフ谷へ！ 18
3 ぶきみな足音 27
4 真夜中の影 36
5 クレージー・ウーマン 52
6 クレニングさんの話 67
7 スプーンの十字架 76
8 オールド・レナ 87
9 ハロウィーンがやってくる 96
10 事件 103
11 かわいい狼男 112

12 伯父さんの涙 120
13 セントルイス行きのバス 128
14 消えたマスク 140
15 不安な日々 152
16 頭のなかの叫び声 161
17 クリスマスの準備 170
18 謎のことば 183
19 たたかうバート 196
20 意外な二人 213
21 奇妙なクリスマス・イブ 230
22 白い朝 238
あとがき 249

登場人物

バート・ケードル……主人公。十二歳。

アーニー・ケードル……バートの弟。九歳。

チャーリー伯父さん……バートたちの伯父さん。

マッジ……酒場「ブルー・レーブン」のウェートレス。

ブラズ……「ブルー・レーブン」の主人。

ブラズの奥さん……足が悪く、くるま椅子にのっている。

トリバーさん……バス待合所兼郵便局の責任者。

クレニングさん……食料品店の主人。

ファーカーさん……質屋の主人。

マクマレー……通称マック。金歯の老人。

フィールドラップ先生……アーニーの担任の先生。

ウィケット先生……校長。

スクラッフ……バートの同級生。

ブーン……保安官。

マイケルズ……副保安官。

オールド・レナ……黒人女性。

ピート・ヘネシー……浮浪者。

影……？

ほかに、話や思い出のなかで、

ママ、ルー伯母さん、ジーン、リーバ伯母さん、

クレージー・ウーマン

ウルフ谷の兄弟（きょうだい）

1　日暮れの町

「チャーリー伯父さん、ぼくたちの夕ごはん用意してくれてるかなあ？」アーニーが、かたかたゆれる窓に鼻をおしつけたままでいった。「どっちにしても、とちゅうでチキンを食べなきゃ、おなかがもたないよ」

「アーニー」バート・ケードルは、ちょっぴり悲しそうな顔をして弟にいった。「もうぼくたち、チキンは食べちゃったよ」。それは一羽まるごとのチキンだった。ジーンが奮発して買ってくれたのだ。バートとアーニーをやっかいばらいできるうれしさに、ジーンは、ちょっとばかり、財布のひもをゆるめてしまったらしい。しかし、そのチキンも、長いバスの道中のうちに二人でたいらげてしまったのだ。

「ちえっ」アーニーは口をとがらせた。「それじゃあ、チャーリー伯父さんちに着くまえにぼくは餓え死にしちゃうよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そういって、また窓ガラスに顔を向ける。

『ワカッタ」コド モタチヲヨコセ』パートの心は、アーニーからふっと遠ざかった。チャーリー伯父さんの電報の文句が頭に浮かぶ。先週、ジーンに打ってよこしたのだ。ジーンは早いとこ二人を手ばなしたくてたまらなかったのだ。ああ、もう思いだすまい、とパートは首をふる。さんざん味わったいやな思い。思いだすだけでも胸がちくちくしてしまう。

「あ、また牛がいる」と、アーニーが叫ぶ。「ぼくに手をふってるよ」パートは弟に向かって、やれやれといった表情でほほえんでやる。まったくアーニーって、へんてこなことばかりいうんだから。

アーニーの頭ごしに外を見た。木々が夕日を受けて、長々とした影を引いている。二人が住んでいたセントルイスでは、長い影など見たことなかった。都会の影はみな短くて、寸づまりだ。大きなのっぽビルやスモッグに飲みこまれてしまうのだ。バスの窓の外に広がる世界は、なんとなしにパートを不安な気分におとしこむ。どこまでもどこまでもつづく平坦な大地。しかし、そういう気分は、見なれない田園風景のせいばかりではなかった。ママが死んでからというもの、パートはたえずこうした気分につきまとわれているのだ。どこにいても、自分とアーニーにはよそものであるような、落ちつかない気分に……。

ふっと、こんなことばが、パートの脳裏によみがえる。「わたしは、あなたたちがかわ

いそうだから引きとってあげたのよ」ママのいとこのジーンがいっている。「でも、自分に赤ちゃんが生まれることになっちゃったんですもの。ね、バート。あなたの伯父さんのチャーリーに頼んでみるわ。あの人も奥さんに死なれて、淋しいでしょうし」。ルー伯母さんと、バートたちの母親は、ことしの早春、前後して亡くなったのだった。

「チャーリーは、妹の子どもたちが別れわかれになるのなんて、いやがると思うわ。わたしは、バート、あなただけなら、いてもらってもいいのよ。あなたはもう大きいんだし」。ジーンはさすがに「あなたなら子守りもしてもらえるし」とは、つけくわえなかった。でも、そう考えていることは、バートにわかっていた。

「ネブラスカのリーバ伯母さんがね」と、ジーンはつづける。「あなたのお母さんのお葬式のとき、アーニーだけなら引きとっていいといってたの。あのひと、都会は小さい子によくないって考えなのね。でも、二人いっしょは無理だっていうの。だから、チャーリーのところへ行くほうがいいと思うわ」

バートの不安な気分は、それ以来ますますひどくなり、ほとんど恐怖感に近いものに変わってしまった。アーニーと離ればなれになってしまうかも知れない。そう考えただけで、バートはぞーっと血のこおるような思いがした。ママが、息を引きとるまえ、ぼくにいったことばは、「アーニーのめんどうを見てやってね」だったじゃないか。それなのに、ア

ーニーと別れてしまうなんて！

『ワカッタ」コド　モタチヲヨコセ』。チャーリーおじさんが、もうちょっと、なにかいいそえてくれたら、バートも、もっと安心していられたろう。たとえば、『コチラ　ハダ　イカンゲ　イ』とか、なんとか。

チャーリー伯父さんって、どんな人だったかな。バートは思いだしてみる。伯父さんはママの葬式には出てこられなかった。ルー伯母さんをなくしたばかりだったからだ。まえには一年に何回かセントルイスに出て来ていた。伯母さんはいっしょじゃなかった。いつも病気がちだったのだ。

チャーリー伯父さんには子どもがなく、バートとアーニーを市内見物によくつれていってくれた。伯父さんは動物園や公園が好きだった。怪奇映画も大好きで、いちど一週間滞在したときなんかは、二人を毎晩、ダウンタウンの映画館でやっている「なつかしのモンスター大集合」を見せにつれていってくれた。

伯父さんは、背の高い、やさしい人だった。バートは伯父さんが大好きだった。でも、いっしょにくらすとなると、どうかな？　バートは三人の生活がどうなるか、見当もつかなかった。二人の子どもを引きとるのは大変なことだ。ジーンを見ていて、それはよくわかった。毎日のようにジーンは、あなたたちのおかげでよけいな仕事がふえて困るわとこ

ぼしていた。
運転手の声が、バートの物思いを断ち切った。「ジェースンです。お降りの方はお早く願います」
「やったぜ、いよいよ到着！」アーニーが歓声をあげた。
ほかに降りる客はいなかった。高々と伸びた木々が木製のプラットフォームをかこみ、夕日の最後の光線がこずえを染めて、まるでろうそくが立ちならんでいるように見えた。しかし、その光も数分後には消えてしまうだろう。
「何時なの」と、アーニーがきく。自分の衣類箱にこしをおろしている。
「八時半くらいだろ。バスがちょっと遅れたから」と、バートが答えた。
「それで、チャーリー伯父さんはどこ？」と、アーニー。
バートは、人気のないプラットフォームを見わたした。二人の背後に、バスの待合所の建物がぬっとたっている。緑色のひさしのついた帽子をかぶった男が、机に向かっているのが窓ごしに見える。バートがいった。「行こう。チャーリー伯父さんは、あそこにいるよ、きっと」
だが、伯父さんはいなかった。
中にいる男の机のネームプレートには、ヘンリー・トリバーと書いてあった。トリバー

さんは映画雑誌に読みふけっている。「すみません」と、バートが声をかけた。
トリバーさんは知らん顔をしている。
「あのお……」と、いったとき、バートは机の上においてある小さな物体に気づいた。一度だけ、これと同じものを見たことがある。古い映画のなかで見たのだ。イヤ・ホーンというものだ。
バートは、トリバーさんの肩をかるくたたいた。トリバーさんは、はっとして顔をあげた。イヤ・ホーンをつまみあげると耳につっこむ。
「ぼくたち、チャーリー・フレクスンの甥なんです」と、バートは大声でいった。「いま、バスで着いたばかりなんです。伯父さんが迎えに来ているはずなんですが」
「チャーリーには会ってねえなあ」と、トリバーさんも大声で答えた。「おめえたちが来るのは知ってるのかい？」
バートは、うなずいた。
「なんなの、これ？」アーニーが好奇心をかきたてられたらしい。「こんちわ！」と、イヤ・ホーンに向かってどなった。
トリバーさんは飛びあがった。「どなるのはやめてくれ」とアーニーに懇願してから、「そうかい、するてえと、チャーリーのやつ、どうして迎えに来ねえのかなあ」と、バー

トに向かっていった。「だがな、あのチャーリーのことだ」と、くすくす笑いだし、「おめえたち、ブルー・レーブンへ行ってみな。ウルフ谷にくだる崖っぷちにある酒場さ。やっこさん、あすこに入りびたりだからな」

「どう行けばいいんです、その酒場まで」と、バートは大声できいた。

「そうさな、そこから伸びてるのがメーン・ストリートだ。どんどん南に歩いていきゃあ、チャーリーがやってた金物屋があるよ。やっこさん、ことし、この店を売っちまったが、まだ看板には、やつの名前が書いてある。そこから西へ曲がるんだ。でっかい森んなかへ入っちゃうような気がするかも知れねえが、心配はいらねえ。林の向こうに、ブルー・レーブンの明かりが見えるはずだ」

「どうもわかんないな」と、アーニーがいった。「どうして伯父さんはここへ来ないんだろう。ジーンは電報を打ったんだろう？」

「なんだね？」と、トリバーさんがきく。

「ジーンから伯父さんあてに電報が打ってあるんです」アーニーがイヤ・ホーンに向かって叫んだ。

「ああ、そうか」と、トリバーさんがいった。「そういやあ、きのう、チャーリーあてに電報が来てたよ。ところが、電報配達の小僧がチャーリーに会えなくってね。ダンベルの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com